

# ことばの教室の研究

帯広小学校の目指す子ども像

「自分が好き 友達が好き 学校が好き 帯広の街が好きな帯小っ子」

- (1) 対話を通して互いの考えの違いやよさに気づき、自他の思いを大切にできる子ども
- (2) 集団の中で、自分のよさを生かしながら、友達と信頼・協力できる子ども

研究主題

「自己を見つめ、互いを認め合い、かかわり合う子どもの育成」  
～互いのよさや違いを認め合う人間関係づくり～

## 1 ことばの教室の研究について

### (1) 本校の研究との関連（道徳的実践力との接点）

ことばの教室の教育課程は、自立活動に依拠し、一人一人の障害状態に応じて、その直接的改善を目指すことを目的としている。

しかし、ただ単に表面上に表れた障害の改善のみの指導にとどまるのではなく、その先にある「豊かな自己表現」「相手との気持ちの共有」そして「積極的な集団参加（社会参加）」といった道徳的実践力を含めた全人的な発達を促していくことにつながっていくものでなければならない。

### (2) ことばのもつ機能と道徳的実践力

ことばは、人が支え合って生きていく上で、気持ちをわかり合ったり共有したりするための手段として、とても重要な役割を果たしている。

ことばのもっている力（役割）を見てみた場合、次のような機能があげられる。

#### ①伝達的手段

自分の思いを伝えたり、相手の思いを受け止めたりといった双方向性のものであり、その土台となるものは相手との気持ちの共有である。伝達機能としてのことばが最終的に目指すものは、「共に生きる」という考え方であると言える。

#### ②思考や記憶を深める

ことばのもつ思考や記憶の力は、相手の考えや意図を汲み取る洞察力として機能する。「ちがいを認め合う」ためには、ちがいの中にある接点（共通点）を見つけて歩み寄るなど、より深い洞察力が必要である。

#### ③行動や感情を調整する

行動や感情を調整するためには、自分自身を客観的に見つめる（「自己を見つめる」）ことが必要である。自身の行動や感情をことばに置き換えることで、より客観的に自己をとらえることができ、そのことが自己実現や対人関係の形成にも大きく寄与していく。

これらのことばがもっている力は、本校が目指す子ども像の実現のために、また子どもたちが集団の中で人とのかかわりを深め、生き生きとした学校生活を送っていくために欠くことのできないものである。

上述したことばのもっている力を育み、最大限に発揮できるように子どもたちを支援していくために、より正確な子ども見方（理解の方法）や効果的なアプローチ（支援）の方法について、自立活動を通して研究を進めていくことにした。

## 2 研究仮説

本校の研究仮説をうけ、ことばの教室において子どもたちのことばの力を育てていくために、以下の仮説を設定する。

### 仮説 1

多方面から情報を収集し、それらを整理するとともに、複数の視点を取り入れて子どもへの理解を深めていくことで、児童のことばの力が伸び豊かな自己表現ができる子どもが育つ。

子どもをとらえる視点として、子ども自身の現在の様子だけではなく、どのような発達経過をたどって現在に至ったか、またその中で、周りの人とのかかわりがどのように影響したかなど、保護者及び学級担任と連携する中で多方面から情報を収集し、より深い子ども理解につなげていきたい。

また、それらの情報を担当者一人で検証するのではなく、通級教室担当者全員で検証することで、さらに子どもへの理解を広げ豊かな自己表現を育むことができると考える。

### 仮説 2

様々な指導方法を組み合わせてアプローチを行うことで、児童一人一人のもっていることばの力を最大限に発揮し、集団の中で人とのかかわりやコミュニケーションを深めていくことで、互いを尊重し合う関係をつくっていくことができる。

ことばの教室での指導においては、語彙や表現力といった知識面でのことばの力を高めていく指導のみならず、ことばの土台になるものを培っていく指導、ことばの運用面での力を高めていく指導、更には、子どもを取り巻くことばの環境を整えていく指導など、様々なアプローチが考えられる。指導法を一つに限定せず、子どもの状況に応じて多角的にアプローチを組み合わせていくことで、ことばの力を最大限に発揮し、より積極的な集団参加、そして自己実現と生きる力につなげていくことができると考える。

### 3 研究の内容と方法

#### ケース会議，事例研究

- ・ケース会議（指導計画会議，指導経過会議，指導評価会議）や事例研究を通して，通級児童全員分についての理解を深め，よりよい指導・支援の方法について協議する。

#### <ケース会議>

##### ・指導計画会議

5～6月に実施する。通級児童一人一人の主訴，生育歴，現症，ことばの問題についての原因推定，指導仮説，指導方針，指導内容について協議する。

##### ・指導経過会議

10～11月に実施する。計画に沿って，指導をすすめ，その経過と子どもの変容等について検証する。また必要に応じて指導仮説や計画の見直しを行う。

##### ・指導評価会議

2～3月に実施する。指導経過と子どもの変容について再度検証することで，1年間の指導の評価を行う。また，スムーズに次年度に引き継げる体制をつくる。

#### <事例研究>

- ・10月～3月に実施する。指導担当者が実際の指導場面をお互いに参観し，子どもへの働きかけやかかわり，使用する教材・教具が子どもの興味関心や実態を反映したものになっているかを検証する。

#### 理論研修，実技研修

- ・聴覚障害についての理解と指導法の研究
- ・構音検査と子どもの構音発達の様子についての研究
- ・十勝地区言語障害児教育研究協議会主催の研修会への参加の他，特別支援教育に関わる各種研修会に参加して研鑽を深める。

## ことばの教室の研究（関連資料）

### ことばの教室における指導・支援の基本的な考え方

#### 基本理念

言語やコミュニケーション障害によって生じている種々の困難を自ら、改善・克服・軽減しようとする意欲を培い、よりよく生活していこうとする子どもを育むための言語障害教育を推進する。

#### 教育目標

言語障害教育の目標は、言語やコミュニケーション障がい改善・克服・軽減のみを目標とするのではなく、子どもが生活していく上での問題の改善・克服・軽減も含めて考えていくことが大切である。つまり、子どもの全体発達を考えた人間的な成長を目標とするものでなければならない。これらの内容を盛り込んだものとして、目標を下記のように設定している。

言語やコミュニケーション障がいのため、本来の能力を十分発揮することができず、集団生活や社会生活の参加において、自分の考えや気持ちを思うように伝えられなかったり、消極的になっていたりする子どもが、主体的・積極的にその障害により生じる種々の困難を改善・克服・軽減していくために必要な個別指導・支援を行う。また、より活発なコミュニケーション活動を目指し、より積極的に楽しく生活していこうとする子どもの育成を図る。

#### 指導・支援の流れ

ことばの教室における基本姿勢は、『担当者子どもとのかかわりやわかり合いを大切にした支援のあり方を考える』ということである。そのために次の四点を指導・支援をする上で大切にしている。

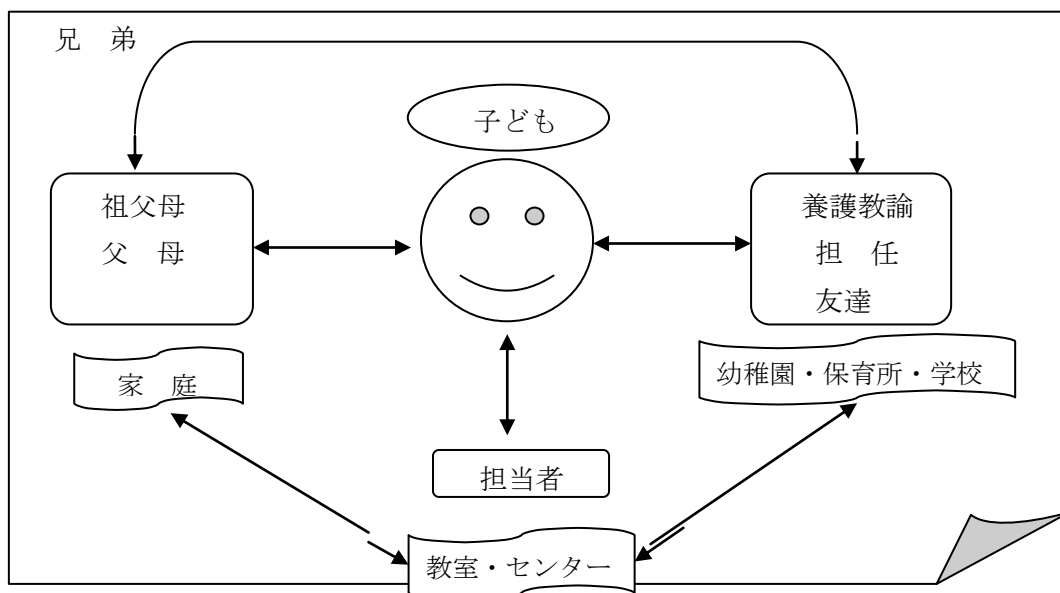
第一に『その子どもにとっての問題をどのようにおさえ、問題の仮説を立てるか』である。この時の『子どもにとっての問題』では、言語症状や聞こえにくさ、コミュニケーション上の困難さや子どものかかえている不安や心配（困り感）などを総合して考えていくことが大切である。『なぜそうなったのか』を考える前に『何が問題となっているのか』をおさえることが必要であり、その際、言語症状だけにとらわれるのではなく、子どもと周りの人々との関係にも着目することが重要である。

第二に『問題の仮説』や『指導仮説』を考える際、家族構成、家庭環境、保護者の思いや不安だけではなく、言語が発達する基になる力がどのように育ってきたか、また、まわりの人との関係や育った環境がどのように影響してきたかということを見ていくことも重要である。そのため、保護者や学級担任と話し合い『子どもが発達してきた過程、特に人

とのかかわりという視点を含めて考えていくことが必要である。

第三に大切なことは、『子どもとわかり合う関係を培うため、担当者がどうかかわったのか、その結果、子どもはどのように反応し変化したのかを見て次のかかわりに活かす』ことである。子どもにとっての問題が改善され、子どもが思い通りにコミュニケーションをとることができるようになるために必要な条件の1つは、子どもと誰かとの間に『わかり合う関係』ができていくことである。子どもは「わかった」「わかってもらえた」などの体験を通して満足感を味わい、そこから「もっと知りたい」「もっとわかってほしい」という思いが生まれ、自ら相手に働きかける積極的なコミュニケーションが始まると考える。また、『かかわる』とは、担当者の教育的な関与全般を示すものである。見守る、待つ、わかろうとする、受け止める、わかりやすく伝える、共感する、ほめる、励ます、課題に取り組ませるなど、様々なかかわり方がある。子どもと『わかり合う関係』を培うために、担当者がどのようにかかわったか、それに対し子どもはどのように反応し、変化したかを丁寧に見て、次のかかわりに活かしていく必要がある。

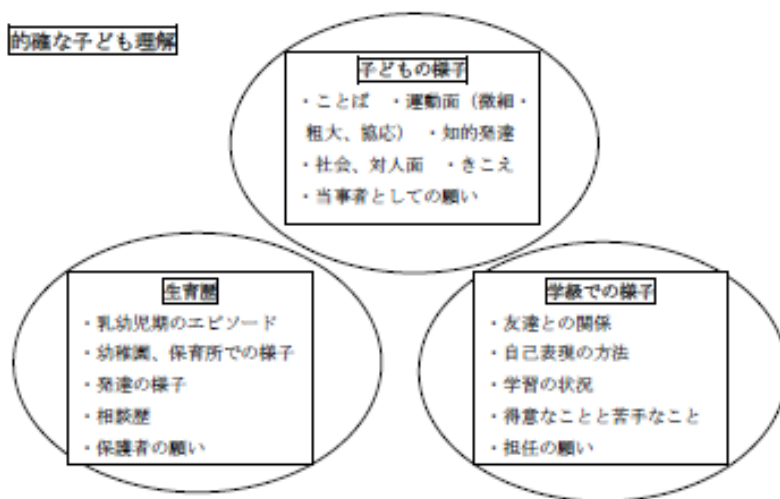
第四に、『子どもをとりまく人々とどのように連携・協働していくか』である。はじめに、よい支援をするための連携があり、子どもが所属する学校において、担任教諭と情報交換し、子どもの様子について共有することが、適切な理解のために必要である。次に、よりよい支援をするための協働があり、同じ方針で、また必要に応じて役割分担しながら支援をすすめていくことが大切である。このように連携と協働は一連の流れの中で行われていく。



また同時に、保護者への支援も指導の一環として重要な意味をもっている。それは、子どもが日々積極的に楽しく生活していくことができるようにするためのものであり、子どもの行動の理解や日常生活でのかかわりに関することが主な内容となる。

言語障害教育では、種蒔きが個別指導、水と肥料をやり育て花をさかせるのが家庭生活、学校生活、社会生活と言われている。このことから、保護者や関係者と、子どもの実態や指導について共通理解のもとに対応していくことが大切である。

**的確な子ども理解**



**適切な指導支援**

